

忙

しいでしよう、と言われるようになった。定年退職の日を文字通り指折り数え、もうあんな忙しきは願い下げだと思っていたから、そう言われると、人様にそんなふうに見えるようなふるまいをしてしまつていやしいかと気になつてしまう。

一つこども寄席の依頼が入ると、会場や日程の打合せや下見、こどもたちのスケジュール調整、演目の選定や構成、それに基づいたチラシやパンフの作成、依頼主とのやりとり、といくつもの仕事ができる。したがって寄席の依頼数とぼくの仕事量とは比例する。落語教室は二年目に入つて依頼数が前年比の三倍増になった。ならば仕事も三倍増になつてははずだが、なんとなく呼ぶ方も慣れてきているのと、部品の共通化を図つたのと(たとえばチラシは、同じ素材を意匠を変えるだけで使い回しする)などで、さして忙しくなつたという感じがしない。

慣れたあたりで痛い失敗をするのがこれまでの習いだが、この秋もその例に漏れず、今思い返しても残念なことがあつた。落語に限らず、およそ表現なるものは、どこでどんなふうに出合ふかが非常に大きい。落語はことに、語り手と聴き手の関係性に大きく左右されるものだから、同じ噺でも置き場所が異なれば、ま

るで違つて聞こえる、取扱注意のしろものだ。

とある会場で、こどもたちと観客の関係をいつものように作ることができず、脂汗が出てくるような思いをした。すべては始まる前に決していたことで、始まつてしまつたらもう引き返すことはできず、そのままいくしかない。予定した時間はしつかり守つて、無事に終演に至つたのだが、なぜこんなことになつてしまつたかと最中もその後も悔いに苛まれた。どうして、などと問うまでもない。ぼくが見逃していたことと、わずかな努力や思い切りで防げたであろうことが目の前に表れているだけだ。

次の日も寄席があつた。前日の痛みをしつかり引きずつていたので、開演ギリギリまで高座の位置や客席の配置を動かし、お客さんとの会話を努めた。前日もできたはずがしなかつたのはなぜだったろう、と思ひながら。

お客様はみない顔をして帰つていかれた。子どもたちも満足げだった。昨日と今日でこどもたちは何も変わらない。違つたのはただ座付き作者であるぼくが仕事をしたかどうかだ。そんなことに気づけただけでも前日の悔いには意味があつた、と思ひたいのだが、一生懸命しゃべつた子どもたちにもお客さんにも二度とあの場をとりもどすことはできない。

老い老いに

木幡智恵美

59

我

が家の二〇〇五年、年明けから我が子のことと氣を揉む日々だった。長女の大学卒業と就職、長男の高校卒業と大学受験、二男の中学卒業と高校受験と、皆重なつたのだ。

長女は早い段階から自分のやりたいことが決まってい、それに向かつて地道に進んでいたの何ら苦労はなかつた。ぎりぎりまで部活もしていたから、身体を心配するのみだった。ところが、男の子たちはまるでつかめない。

長男は、中三になつていきなり「大学に行きたいから南高に行く」と言い出し、周りが反対するのを押し切つて志望校に入った。案の定授業についていけない。大嫌いな英語があると休み、追試まですつぽかしそうだったのを何とか受けさせ留年は免れた。塾に行くと言いが言い出したのに怠け休みし、センター試験ではあれだけ注意されたのに解答用紙を間違える始末。担任はあれこれ提案してくれたけれど、本人はもう浪人することしか考えていない。高校にはもう一年受験のために通うクラスがあるが、追試を受けるようでは入れてくれない。結局、塾の関係の予備校が東京にあり、推薦状をもらつて入塾することになった。その年の暮れに、「家に帰つて勉強する」と電話してきたことがあつた。不安はあつたものの「自分で決めたことだし、最後までやりなさい」と突っぱねた。その後は何とか乗り切り、第一志望ではないものの、本人が納得のいく大学に入った。今年の盆に帰つて来た時、「何であんなに大学に行きたかつたの」と聞くと、「友だちのA君が勉強出来て、あんなふうになりたいなと思つたからかなあ」と言つていた。そして、二男はと言えば、今をのみ生きるタイプで将来など考えていない。勉強が嫌いだから進学校へ行かなというだけでははつきりしていた。机に向かつて五分と持たず、「頭が爆発する」と言つて逃げてしまう。受験勉強もせず、おまけに面接では全くトンチンカンな受け答えで結局は第二志望の学校へ行く羽目に。しかし、人生どう転ぶか分からない。高校で調理師免許をとつたお陰で今の職に就いている。

長男は浪人の一年を含め七年かかつて大学を卒業し(私立の理工系で授業料が高く、私たちの経はか細くなつた)、今の会社に勤めて十数年になる。仕事上必要な資格も数々取得して真面目に勤めているようだ。

30代フリーター 朝日新聞の世論調査（11月15、16日）では、高市早苗内閣の支持率は69%で、10月の発足直後の68%と並ぶ「歴代屈指の高さを維持している」（11月17日同紙朝刊）。過去の政権に全くなかった高市政権の特徴は「初の女性首相」ということにほとんど尽きる。それだけでこれほどの高支持率を稼ぎ出していると言える。

年金生活者 政治というものが必ずしも「事実」にもとづいて動くのではなく、期待や希望や主張といった「観念」によつて動く特性をもっていることを物語っている。近代社会はとりわけその傾向が強い。

近代以前の封建制のもとでは、政治と経済、国家と社会が未分離の状態にあった。それが分離して成立したのが近代社会だ。マルクスはそのさまを次のように描いている。

《政治的国家が真に成熟をとげたところでは、人間は、ただたんに思想や意識においてばかりでなく、現実において、生活において、天上と地上との二

重の生活を営む。天上の生活とは政治的共同体における生活であつて、そのなかで人間は自分を共同的存在と考へている。地上の生活とは市民社会における生活であつて、そのなかでは人間は私人として活動し、他の人間を手段とみなし、自分自身をも手段にまでおとしめ、疎遠な諸力の遊び道具となつてゐる。》（「ユダヤ人問題によせて」城塚登訳）

「政治的国家が真に成熟をとげたところ」とは、政治が経済から、国家が社会から分離したところという意味だ。そのものでは、社会は過酷な競争原理が貫徹する「市民社会」と呼ばれるものに変貌する。そうした「地上」の過酷さを「観念」のなかで克服するのが「天上」としての国家にほかならない。そのなかで「人間は想像上の主権の空想上の構成員」（同）となる。

「初の女性首相」の誕生は、「想像上」「空想上」のジェンダー平等の実現であり、高市はまだ実現していない現実の国民の平等を国民に代わつて

象に向かう性質がある。遠くへ向かえば、それだけ視野が広がり、その意味で普遍性を獲得していく。

この普遍性に向かう幻想の性質が、個別の変化を全体の変化であるかのように見せる働きをする。郵政民営化を、国民を重んじる社会の到来のよう

実現する代替者として登場した。30代 今世紀に入つて高い支持率を獲得した政権としては、小泉純一郎と鳩山由紀夫の政権がある。

年金 どちらも、それまでの政権がなし得なかったことをなした点で、高市政権と共通している。小泉政権ほどの政治家も言うだけで実行しなかった郵政民営化を実行した。鳩山政権は選挙で正面から「政権交代」を訴えて自民党から政権を奪取してできた初めての政権だ。高市は「初の女性首相」に就任するという、それまでもできなかったことをやってのけた。3者とも、実行したことの画期的な新しさだけで、政策全般への期待を国民に抱かせた。

「天上と地上との二重の生活」というマルクスの言い方に従うなら、小泉の郵政民営化のスローガン「官から民へ」も、鳩山のスローガン「政権交代」も「天上」において実行され、その「天上」で生活する人間がそれらの成果を享受した。なぜなら、そこでは人間は「自分を共同的存在と考えてい

に、政権政党の交代を、日本の政治の一新のように、「初の女性首相」の誕生を、平等な社会の到来の保証のように思わせる。

国家はこの幻想の特性を使って、市民社会では実現していない理想の状態を幻想の中で実現する。その構造は宗教と変わらない。その権威が国家による富の再分配を可能にし、市民社会に介入する権力として発現する。

もし国家が「幻想」としての、あるいは「代替物」としての分を超え、その権力を使って「現実」に市民社会を自らの考へる「理想」に従わせようとすれば、それに逆らう個人や集団を必ず抑圧する方へ向かう。

小泉自民党は郵政民営化に反対する自党の議員に衆院選で刺客を送った。菅直人の率いる民主党は公約破りの消費税増税に反対する小沢一郎を党員資格停止処分にした。スパイ防止法を日本を「理想状態」にするのに必須と考へる高市が国民への抑圧を強めない保証はない。

ニュース日記 993
中村 礼治

高市人気の秘密

30代 「天上」と「地上」は矛盾をはらんでいる。

年金 「天上と地上との二重の生活」は、幻想としての国家と現実としての市民社会との二重性を指す。市民社会がばらばらな私人から成るのに対し、国家が「共同的存在」から成るのは、現実が個別的であるのに対し、幻想は普遍性を帯びるからだ。吉本隆明は幻想のこの特性を「遠隔対称性」と呼んだことがある。人の心は常に遠くの対